

## 座談会

# 流行と神道文化

平成二十四年一月十七日（火）

東京大神宮マツヤサロン



### 〔出席者〕

#### 山村明義

ノンフィクション作家。昭和三十五年熊本県生まれ。早稲田大学卒業後、雑誌記者を経て、フリーランスとして活動。主な著書に『日本新党の末路』『遺伝子商売』『神道と日本人』等多数。

#### 加門七海

小説家・エッセイスト。東京生まれ。多摩美術大学大学院卒業後、美術館学芸員を経て、作家デビュー。主な著作に『人丸調伏令』、『東京魔方陣』『うわさの神仏』『お祓い日和』等多数。

#### 清水祥彦

神田神社権宮司。昭和三十五年、東京都生まれ。國學院大學卒業後、鶴岡八幡宮奉職。神田神社禰宜を経て現職。

#### 武田 淳

埼玉県神社庁録事。昭和五十五年、埼玉県生まれ。國學院大學卒業後、神社本庁奉職。神社本庁録事を経て現職。

#### 浅山雅司

（司会）財団法人神道文化会事務局長。神社本庁総合研究部研究課長・國學院大學兼任講師。昭和四十四年、兵庫県生まれ。國學院大學大学院博士課程満期退学。國學院大學日本文化研究所助手を経て現職。



## 浅山 今回

の座談会は、テーマを「流行と神道文化」と致しました。最近、「スピリチュアルブーム」、または「パワースポット」という

言葉が世に溢れています。その波及といいますが、一部なのか、それ自体なのか、表現しにくいところですが、今まで取り上げられることが少なかった「神社」というものが、非常に注目を浴びています。単に「神社」と言うと、一つの「施設」・「場所」として捉えられがちですが、この国の根幹に係る宗教的な存在、信仰的な部分、「神道」という言葉に置き替えることもでき、「神社ブーム」もしくは「神道ブーム」という表現もできるかと思えます。

そんな社会の潮流を受けて、この数年、「神社」「神道」「神話」を題材とした雑誌や書籍が非常に数多く出版されています。本屋や、またコンビニの書籍のスペースに入りましても「神道」という言葉、「神社」という言葉が目に入らな

い日はない位に、世の中に溢れているかと思えます。これは少し前では想像がつかない、専門店の本屋でしか考えられなかったようなことが、日常の生活の中起きています。この三年程の間に刊行された「神社」「神道」に関する企画を取り上げた雑誌や冊子の内で、目立ったもの、手近かに有ったものをお持ちしました。これだけでもかなりの量ですが、実際には、この何十倍という大量な数が存在しているかと思えます。雑誌や本の企画だけではなく、実際に神社にお参りをするという行為自体にも注目が集まっているように思えます。初詣や節分などの四季折々のお祭り、初宮、七五三、結婚式といった人生の節目のお参り、また開運、厄除け、縁結びといったご祈願。そしてそう言った「場」を通して、「神話」や「伝説」といったものも、スポットライトを浴びる機会が多くなっています。本日の会場であります東京大神宮のように、日頃のお参りが絶えないといった様子もあります。これは、「神社」や「神道」といった存在に対して、非常に興味が高まっている世の中の風潮・潮流を反映しているのではと思います。

実際に神社に参拝する機会の増加に伴ってか、雑誌等の企画も徐々に変わってきているように思えます。初めは観光案内の延長のようなものだったのが、神社の紹介だけをするだけではなく、徐々に、そこに祭られている神様は何者である

のか、どんな活躍をされたのかにまで踏み込んでくるようになっていきます。また近々の例では、絶対に作法通りでなければならぬと言う様な、ちよつと行き過ぎているのかなと思うような紹介のされ方もあります。観光的な側面だけではなく、そういった神社への参拝作法自体にも興味が高まっていき、それ以外にも「もつと知りたい」という知識欲の高まり、需要の高まりというものを実感させられています。

今回はそういった潮流といえますか、風潮といえますか、それこそまさに「はやり」であり、「流行」であろうかと思いますが、そういったものを踏まえて、この時代、現在、こういった神社神道を取り巻く機運、ムーブメントを一つの神道文化の形ではなかるうかと考えまして、現在、社会一般から何が求められていて、そして何がどのように発信されているのかを考えていければと思います。

よく言われます不易流行という言葉があります。これは神社の世界、神道の世界にも当然ございます。そういったところから何が発信されようとしているのか、何が求められているのか、そういったことから神道文化の一つのあり方について考えていければと思っております。座談会を行う中で、何もなく話し続けるのは非常に難しいと思いましたが、流行、伝統、時代、需要、供給、信仰、好奇心、個人主義、祈り、

願いというキーワードを挙げてみました。話題を縛るという訳ではないですが、こういった言葉を念頭に置きながら、これからのお話を進めていければと思っておりますので、宜しくお願いします。

先ず最初に山村先生。先生はこの度、『神道と日本人』と言う本を出版されました。これまでいわゆる政治方面の報道を中心に活躍をされておられた方が、何故、急に「神道」を題材として本をお書きになられたのでしょうか。執筆のきっかけや、興味の中心となっている点などについて、お話しただき座談会の「きつかけ」にしたいと思います。

**山村** 私の場合は非常に変わり種といえますか、変わった角度から「神道」という世界に入ってまいりました。昭和五十年代後半、私は社会人として、先ず、いろんな世界を見る、日本あるいは世界を対象として森羅万象を捉えていくというジャーナリストの世界に入りました。分野としては、所謂、政治の世界、かつて「政（まつりごと）」と言われていた世界を対象とすることになりました。

私が駆け出しの頃、指導してくださった方に、正に政治とは森羅万象を司ることだと教わりました。人間の希望や欲望、あるいは時代の要請を実現させていくのがいわゆる政治であり、それを調整していくのが「政」であると。当時まだ新聞



社や出版社でも、電話をかけて「政治部をお願いします」と言うときに、政治部と整理部の発音が紛らわしいので、「まつりごと」の政治部をお願いします。す。」と書いていました。これが昭和五十年代までの「文化」でした。それがいつの間にかに、徐々に失われていったようです。政治とは森羅万象を司るものだという意識と同様に。もう一つ大切なことに、「中心に何を据えるか」ということも教わりました。物事を中心に誰を据えて、何を大事にするか、何を大切に扱うかという気持ち、或いは、そういう作法。それがなければ、政治とは立ち行かないものだということ。先輩から教わりました。改めて考えるに、神道の「祭」とほとんど同じではないかと思えます。この辺りが私の社会人としてのスタートにありました。

また後でもお話したいと思いますが、昭和五十年代から日本の政治というのは、総理の交代がとても頻繁になっていく

など、いわゆる「政」としての政治がどんどん機能しなくなっていく時代となっていくと思います。特に平成に入ってから、阪神大震災、オウム真理教事件も起き、あるいは政治的な激変が起きる年には、なぜか天変地異や災害と言ったものが必ず起きています。印象的だったのは、総理大臣であった小渕恵三さんが亡くなられた平成十二年の出来事です。四月二日に倒れられて、確かご葬儀が五月十四日だったと記憶しているんですが、その葬送の日に永田町に雷が、それは本当に凄い雷が落ちてきました。その時、私も丁度、国会議事堂を見上げていたのですが、凄まじい雷が三つに分かれて国会議事堂に落ちてきました。後で聞いたら、避雷針が壊れる程の凄まじい雷だったそうです。同じ年の十月には、自民党の加藤紘一さんによります、所謂「加藤の乱」というのがありました。このときも、凄まじい豪雨になりました。私も空を見上げておりましたら、突然、暗雲が立ち込め、文字通りの土砂降りの雨になりました。実際にそういったことを目の当たりにして、このころから私は、所謂「政変」・政治の変革というものと、天変地異、災害というのは、実は連携・関連しているのではないかという実感を持つようになりました。やはり日本の古くからの伝統、あるいは精神文化である「政」の本当の意味を、もう少し日本人は見直さないと、見詰め直していかないと、これは立ち行かないのではないかと。

そのころから少しずつ「神道」を取材の対象として全国を回り、折々に触れて多くの「神社」をお参りしてきました。そのころから数えますともう二、〇〇〇社ぐらいの神社をお参りして、沢山の神職さんにお会いしました。恐らくはお話を伺った方だけでも五〇〇人を越えるかと思います。その中で色々なことを気づかせていただきました。日本人の精神性、生き方、美意識、その根幹に存在する日本の伝統宗教としての「神道」、例えば、日本人にとつて魂とは何かなど……。そういう話を聞き、考えていくにつれ、今の日本にも「神道」というものが益々必要である。むしろこれからも「神道」の精神を生かしていかなければならない。今も現実にそれは存在しているのだけでも、それ以上に生かしていくことが必要だと実感したのです。こういう現実社会での「実感」が、この本の上梓に至った動機になります。

**浅山** 「政」を取り巻く世界の変化として、「昭和五十年代」と「平成」という二つの節目について触れられて、その辺りから「政治」が、上手く回らなくなり、混乱した時代になってきたのではないかと言うお話は非常に興味深く拝聴しました。「時代の節目」と言う言葉、この後の話題にも関連してくる非常に重要なポイントだと思います。

それでは、次に加門先生にお願いします。先生は、多摩美

術大学大学院卒業後、学芸員を経て、作家活動に入られました。デビューは平成四年の『人丸調伏令』だと伺っています。また平成六年、私も非常に衝撃を受けたのですが、『大江戸魔方阵』等のオカルトテイストな著作に始まり、さらに最近では、『うわさの神仏』、『うわさの人物』、また『お祓い日和』、『怖い』が、好き！』等々、ルポルタージュといえますか、体験型のエッセーを発表されておられます。なぜこのような形で作家活動に入られたのか経緯や、執筆に到るまでの発想などについてお話しいただければと思います。

**加門** 私は美術大学出身で学芸員と言う、ある意味、一般的ではない専攻を経て作家になったのですが、「美術が好き」と言う前に、「神社が好き」、「お寺が好き」だったんです。他の取材でも何で社寺が、特に「神社」が好きになったのかとよく聞かれるのですが、理由は全くわかりません。とにかく、小さい頃から好きで好きでしょうがなかつたというだけです。今日も大神宮さんに正式参拝をさせていただきましたが、事前に「正式参拝があるかも」と思っていたにも拘わらず、いざ拝殿の中に入るとドキドキしてしまうんですね。変な言い方ですけど、人垣越しに覗いていたスターにいきなり正面から出会ったみたいなきらめがあるんです。だから、こういう機会をいただくたびに「え？ ちょっと待って、私、



今日、こんな格好してるのに」とか、「こんなはずじゃなかった」というように思っただけです。小さい頃も同様で、お祭りのときも、普段のときも、神社へ行くと、すがすがしいし、おもしろいし、きれいだし、まさに「あなさまやき、あなおもしろ」といった感覚を受けます。また、神社は子供のころから遊び場所にしていました。私は東京のごちゃごちゃした下町で育ちましたので、

幼い頃から、神社の社叢というものを町並みの中でちょっと特異なものとして感じてました。木が鬱蒼としていて、ある意味で暗い、ほの暗い空間でもあったし、静かだった。そういったところに特別な関心というか、子供ながらに落ちつくような気持ちを持っていたのかもしれないですね。ですから、別に本を書かなくても「神社が好き」ということで生きていたと思うんですが、たまたま物書きになることができました。デビュー作は『人丸調伏令』という、今ではもう絶版です

が、神社が舞台の小説でした。絶対に読まないでくださいと前置きしますが、そのとき何が一番書きたかったかという点、自分で「祝詞」を作ったかたんです。神社の中に潜んでいる化け物と呼び出すための「祝詞」を自分で作ってみたい。それが最初の小説を書いた動機です。

そんなデビュー作以来、伝奇的なものを書き続けていたのですが、『大江戸魔方阵』、そして『うわさの神仏』といったものを書く一つのきっかけが、昭和五十年代の半ば頃にありました。先ほど「時代の節目」というお話が出ましたね。中身は違いますが、同じ時期になります。丁度、大学を卒業した頃、自分のお金が自由になるようになってから、ともかく行くところといえば神社ばかり。一時期は地図を買ってきて神社マークに全部丸をつけて、その地域を「絨毯爆撃」のように全部回る、言い方は少し乱暴ですが、そんなこともやっています。

ところが、その当時というのは、もちろん、今のような「パワースポットブーム」はありませんし、「神社めぐり」をする人にとつては、言わば「暗黒時代」だったんです。地方に行つて、例えば一宮のような有名な神社ではなくて、地元の小さい神社だけど、歴史の有るようなところに行きたい。そう思つて、「この神社に行きたい。」と言うと、タクシীর運転手や、道を尋ねた人達みんなが口を揃えて「何でそんな

とこに行くの？ 何もないよ。」つて言うんです。「え？何もないんですよ。神社がありますよね。」と反論すると、次に出てくる言葉が、「宗教やつてるの？」なんです。宗教というのは当然、新興宗教のことを指しているんだと思いますが、もう絶句してしまう訳ですね。「やつてると思われてもいいからそこに行くんだ。」みたいな思いはあるんですけど、喧嘩を売りたいわけではないので、「特定の宗教はやっていないですけど、ただ昔から神社が好きで……。」と、ブツブツ言いながら、場所を教えてもらおうという感じで。

オウムの事件の頃は本当に特にそれがひどかったです。神社で摂社や末社や境内を見て回って、写真を撮ったり、メモを取ったりしていると、お巡りさんに職務質問をされるんです。いきなり後ろに二人がバツと立って、「何してるんですか」と。「お参りだよ！」と(笑)。「それ以外、何なんだよ」と。神職さんからもそう言われたことがありました。胡散臭いというか、「何で神社に興味があるの？」と不審がられる。それがとてもショックでした。

神社はとても面白いし、不思議なことでも沢山ある。なのに何もないと言って、放置するのはすごくもったいない。土地というものに対する歴史、神々の由来から、お祭りの仕方から、日本古来のいいものがいっぱい詰まっていると思っただけです。だから、書くことでそれを知らせたいと思っただけ

す。『魔方阵』では、神社の配列というものに中心を置いて、「神社はもしかしたら日本の歴史と本当に切り離せないところにあるんじゃないの」という気持ちを書きましたし、『うわさの神仏』では、ちよつと茶化したようなことも書いていますけど、ともかく面白いと思つて欲しい、ともかく興味を持って欲しいという理由で書いたんです。だから、読者から『魔方阵』を読んで、あるいは『うわさの神仏』を読んで、この神社に行きましたと手紙をもらうのが何よりうれしかったです。「やつたぞ」というような気持ち、行けばおもしろい、行けばスゴいというのが判るだろうというカタルシス(精神的な昇華)を得ながら書いていました。ただ、今日のテーマでもある「パワースポット」という言葉が出てからは、またちよつと違う思いを抱くようになってきました。これについてはまた後の方でお話できればと思っています。

**浅山** 「神社が好き」ということが、何よりも原動力になつているというお話でした。神社をお守りしている神職さんや地元の人にとっては、「何でこんなところに？」という疑問があるかもしれません、そこには地域の歴史や、信仰の営みがあり、そこに興味を引くものがあるんですよ。ですが、時においては、そんな人が神社に来ると、神職さんや地元の人にとっては疑問を感じてしまう。そんな現実もあり

ます。加門先生はオウムの子の後の話と仰いましたが、平成に入った直後も同じようなことがあったと思います。

**加門** そうですね、昭和と平成の切り替わりの時期、大喪の礼とか即位の礼の時期もそうでした。丁度、左翼の過激派があちこちの神社に放火した事件があった頃ですよ。当然、警備上、必要なことで、その気持ちも判るのですが、不審者扱いされると、本当に神社が好きでお参りしているだけに、やっぱり傷つきますよね。

**山村** やはりその「時代」と言うのは大きな要素ですね。知らない人がいると、それだけ警戒されるという、非常にナーバスな「時代」でした。しかし、このことに関して一つ不思議に思うことがあります。都市部だけかもしれないですが、街中を歩いていて、たまたま通りかかったお寺にお参りしよう遅い時間帯に入っていくと、お寺にいる人に「出ていってくれ」と言われることがあります。全てのお寺がそうではないのでしょうか。でも神社では、小さな神社でもそんなことは無くて、にこやかに頭を下げられる。これは不思議なコントラストがありますよね。

**加門** 二十四時間オープンなのが神社だと私も思ってい

ます。確かに文化財になっているような大きな神社では五時で門を閉めてしまうところもありますが、出雲大社でも、参道から玉垣の手前までは夜でも入れます。その辺に神社の懐の広さというか、場所や人との繋がりや距離感が、今のお寺とは全然違うと思いますね。そういつたオープンなところは、神社の面白いところだと思います。もしかしたら、こういつたところにも「神道」の精神性つてものはあるのかなとも考えますね。

**浅山** それでは、次は清水先生にお願いします。今、山村先生と加門先生が、所謂、「神社」の内側からではなくて、その周りにいて、自分たちは興味を持って、こういう「神社」の世界、「神道」の世界にアプローチをし、様々な経験を通して感じられたことをお話してくださいました。では逆に、「神社」の側からどのような形で、そういう興味を持っている方へ、また今まで神社とは縁のなかつた方にアプローチをされているのかを中心にお願したいと思います。

**清水** 私が奉仕している神田明神は、東京都の中心部の千代田区という立地条件にあります。氏子地域は、千代田区の神田、中央区の日本橋、大手町・丸の内、また秋葉原といった都市部にあたり、所謂、無味乾燥な大都会のコンクリー

トジャングルの中に位置する氏神様です。伊勢の神宮のような森に包まれたり、山があつたり、川があつたり、そうした自然環境の中にある神社ではないということを、神田明神という神社に奉仕している身としては、いつも痛切に感じています。都市の街中における神社がどうあるべきかということ、常に考えながら行動してきました。

神田明神が新聞に取り上げられた記事を中心に簡単な資料にまとめてみましたのでご覧下さい。先ず一枚目ですが、神田明神の初詣に関するものです。神田明神は、元旦からの三日間よりも、むしろ企業の仕事始めの四日からの方が昇殿参拝が多いのです。最近では、都心部の他の神社でも同様の傾向にあります。今まで初詣は家族や近縁の人たち、また恋人



同士などで連れ立つてのお参りが中心でしたが、所謂、支店や各部署、会社の組織を単位として初詣をするという風習が定着し、近年、非常に増えてきて

います。私が神職になったばかりの三十年程前には、余り見られなかった光景です。そうしたところからも、「神社への信仰の在り方」、「参拝者の（宗教的）ニーズ」といったものが、時代の変化と共にどんどん変わってきているのかなと感じています。

次に二枚目をご覧下さい。今年一月に成人式についての記事です。皆さんもご存知だと思います。「AKB48」というアイドルグループが「秋葉原」を中心に活躍しています。既に「秋葉原」の枠を越えて広くメディアの中でも活動をしているのですが、「秋葉原」は神田明神の氏子区域と言う関係で、今年成人式を迎えた十九人のメンバーが神田明神に参拝したことが紹介されました。「神社」はどうしても保守的なものですが、手間がかかるとか面倒くさいということもありませんが、マスメディアに対してクローズド・スタンスの対応が多くなつてしまします。そこで私どもは、マスコミやこうした芸能関係の方を含めて、むしろオープンな姿勢で受け入れてきました。神社というものにも多くの方に親しみを感じてもらい、今まで神社に御縁がなかった方々にもどんどん神社に興味を持ってもらえるように仕向けていければと思つています。

さらに次の頁では、神社で行った三つのシンポジウムの話題、一つ目のシンポジウムは「平野啓子の「語り」の世界

鎮守の杜からの祈り 日本神話と災害教訓に学ぶ夕べ」と題するもの。二つ目は「災害と企業倫理」と題して、大震災に際して「神社は何ができるのか」を問い直して、時代性というものを意識しながら企画しました。また三つ目は、「秋葉原」で三年前、無差別殺傷事件という、非常に悲しい出来事が起きました。そういった社会風潮に対する警鐘を鳴らす意味で、神社だけではなく、仏教や儒教の方々とも手を携えて一緒にシンポジウムを開催してきました。また「秋葉原」という街は、サブカルチャー、ポップカルチャーが非常に盛んです。この街では、髪の毛を赤や黄に染めた女の子たちが、巫女さん：アニメのキャラクターの格好をして歩いています。そうした方々にも、本物の巫女さんと、さらに神社というものを知ってもらいたいと「巫女さん入門講座」を開き、メイドさんにも実際に参加してもらいました。

それ以外にも「神田祭」でも新しい取り組みを行っています。伝統的な祭事、お神輿だけではなく、『ケロロ軍曹』というアニメのキャラクターの山車を登場させたり、「メイドさん」にお神輿を担いでもらったりしながら、子供たちやその場に集う人にお祭りを楽しんでもらっています。

現代は非常に流動的な世の中だと思います。またグローバルスタンダードと言う考え方のせいか、非常に不安定な格差社会が出来上がっています。特にこれからの社会を担う若い

方たちが潜在的な不安を抱えている現代社会の中で、神社が気さくでハードルの低い心のやすらぎの場所として、少しでも心の安定性を取り戻せるようになっていければいいのではないのでしょうか。そもそも「神社」は開かれた場所だと思います。そしてその「神社」が、少しでも若い人たちの心の拠り所になれるような役割を果たしているようになれば、それがそのまま、「神社」を活性化させていくことになるのではないかと考えています。

**浅山** 神田明神での初詣の人手について、三が日ではなく四日からの方が多くなったのは、「参拝者のニーズ」が時代と共に変化してきたからではないかと言うご指摘は、非常に興味深く感じました。実は、私、お正月の四日に神田神社にお参りに行ったんですが、周りにおられた方々は確かに、仕事始めだからお参りに来たという話をされていました。すごい数の人たちが境内にびつちりと並んでおられたので、狛犬の前にすつと進んで、そこから斜からでしたが、お参りをさせてもらいました。拍手を打ったとき、並んでいる方々が一斉にこちらを見られて、「申し訳ない。」とところの中で呟いてしまいました。この「参拝者のニーズ」については、また後段で触れていただければと思います。

神田明神の活動として挙げられた「巫女さん入門講座」や

神田祭での『ケロロ軍曹』の山車やメイドさんの担ぐ神輿について、アイキャッチといいますが、キャッチーなものを使つて、まず「神社」に多くの人に神社に集うきっかけにしよう、そして「神社」から様々な情報を外に向けて発信していく、若い人の心の拠り所となる場所を目指したいというお話がありました。これは、先ほどから話題に出ている「神社の在り方」そのものだと思うのですが、このあたりもう少しお話をお願いできればと思います。

**清水** 先ず第一に「神社」とっては立地条件と言うのは非常に大きな要素だと思っています。自然環境の豊かな立地であれば、こうした企画をやつても、なかなか受け入れられるものではないと思います。神田明神では「秋葉原」に立地している氏神様ということで、こういうことが割とスムーズに進んだのだと思います。そうした「神社」の立地条件を踏まえた上で、神職が「時代性」に柔軟に対応して行かなければならないと思います。その中で、伝統を踏まえた上で「新しいストーリー」を作つていかなければいけない。それが、神田明神では、「巫女さん入門講座」であつたり、地域との様々なジョイントのイベントであつた訳です。やはり「神道」というのは常に、今をいかに生きるかということを生第一前提としています。「仏教」とは違って「過去」や「生

と死を追求する」信仰ではありません。今を如何に生きるかを最も大切な課題にしていると思います。そうした今の私たちの「生」をより充実させるという意味で、現代社会に柔軟に対応した「神事」と付随する「行事」に、今までそうではなかった人たちにも関心を持つてもらえるように仕向けていく。多くの人たちに神道の「新しい価値観」や「多面性を持った多様な価値観」というものを知ってもらおう契機にするというのが、「巫女さん入門講座」にせよ、『ケロロ軍曹』にせよ、それが一番のきっかけでした。

**浅山** 清水先生には神田明神での活動、所謂、一社で行つた活動についてお話していただきました。それでは、次に武田先生にお願ひします。先生は埼玉県神社庁にお勤めですが、一社一社の枠を越えた神職さんたちの活動、埼玉県全体の神職さんの連合体としての神社庁としての活動としてどんなことを行つてきたか、特には、「神社の神主さんと神社に行こう」の企画などについてお話しいただければと思います。

**武田** 埼玉県神社庁が行っている「神主さんと神社へ行く」という旅行を通じた教化活動を中心に話をして欲しいとお話をいただきました。私の勤務する埼玉県神社庁では、県内の神社約二、〇〇〇社を包括する業務を行っています。



私の社会人としてのスタートとしては神社本庁から始まりましたが、その後、縁あって埼玉県神社庁に転任し、「神主さん」と神社へ行く「の企画の立

ち上げに携わることになりました。「神社本庁や神社庁は、神社界におけるサービスマンであるべきだ」というのが、私の仕事に際しての信念ですが、これこそその具体的な形のひとつだと思っています。

ここにも「神社」や「神道」に関する本が並んでいます。全てが「神社神道」ととって正しいことが書かれているかという点、必ずしもそうではありません。そんな現状に、何か出来ることはないかということから考えた企画でした。例えば、一時期注目を集めた占い師の「細木数子さん」や風水で有名な「Dr・コパさん」が、テレビ番組などで発言したことが、社会的な問題といえますか、我々の世界で問題になったことがあります。これも我々神社界がマスメディアに強

くないせいもあると思います。参拝に来る人が増えるのは良いことだと思のですが、誤った「情報」に影響されて、誤った知識でお参りをされる方が非常に多いことには驚きました。「パワースポット」や「スピリチュアル」という言葉で、若い人たちの目がちらに向いてくれるのは良いですが、誤った知識がどんどん広がってしまうのは怖い。何かを手を打たなければという思いから、「神社の神主さんと神社へ行く」という旅行を通じた教化活動を企画したのです。

平成二十一年に始めてから三回、実施しました。初年度は神社参拝が中心でしたが、二年目からは装束を着る体験等も取り入れていました。ただ装束を着るといって、「コスプレ」だと思われてしまうかもしれませんが、それだけではありません。参拝の作法を教えたり、神社の歴史の話や、神道の話もしつかりしています。また一般の人にとって、神主さんと直接お話しする機会はありませんが、そんな機会を積極的に作ることで、より「神社」を身近に感じてもらいたいと考えています。おかげさまで昨年度は満員御礼となりました。今年は新たに「神主さんと伊勢神宮へ行く」という企画も立ち上げました。一月四日から募集を開始して、昨日の時点で既に四〇名を超える参加申込みをいただいています。「言挙げせず」の言葉通り、これまで神社界からの情報発信は少なかつたと思いますが、「パワースポット」として

神社に目向いている今こそ積極的に「言挙げ」していくべきであろうと、埼玉県神社庁では「神社ファンを作ろう」をコンセプトに、一般の方に向けたアプローチを少し強目に行っています。他にも「未来の神棚コンテスト」とか、「鳥居付神札立てプレゼントキャンペーン」などとも連動させながら、一般の方になるべく神道や神社、お神札等を身近に感じてもらおうことを目的に様々な企画を進めています。

「旅行」を通じた教化活動を「新しい手法」だと思う方もおられるかもしれませんが、そうではありません。その昔、「御師」と呼ばれる人たちが、同じような活動をしていました。今でいうツアーコンダクターの先駆者的な存在でした。それを我々神職は現代バージョンでやっていく必要があるのではないのでしょうか。近い例では、神社本庁でも昭和二十八年から「旅行業」を取り扱っていました。「旅行業」自体は廃業したようですが、実は現在ある大手の旅行会社よりも前から登録を受けていました。昭和三十二年当時の通知を見ますと、「営利を目的とせず、旅行者の負担を軽減し、多数参拝者の便を計り、もつて所期の効果を挙げる様積極的に取扱い願ひます」とありました。当時も「旅行」を一つの教化活動のツールとして扱っていたことが判ります。現在は「個」が主体になっている時代ですので、団体参拝・集団参拝というものは、なかなか流行りません。地域性もあるかもしれま

せんが、各神社で旅行を企画して総代を中心に募集をしても、なかなか人が集まらないようです。そこで逆に、神社の外側にいる人たちに向けて、個人を対象とした旅行を企画することによって、何とか神社に親しみを持ってもらおうという思いで企画を立ち上げたのですが、当初は告知方法などに苦戦し、なかなか人が集まりませんでした。三年目にして何とか満員御礼が出せるようになりました。

当県のツアーに参加した方の話を聞きますと、「神社は敷居が高い」というイメージがあつたみたいです。特に神職や巫女に気軽に話しかけていいものかどうか判らないという方がたくさんいました。このツアーでは、神職と参加者は常に一緒にいる、質問したい時に直ぐ質問ができる、食事も隣でする、という形を大切にしました。そうしたら、「何でも気軽に質問できてよかったです。」とか「神社や神職さんとの距離が縮まったような気がする。」なんて感想もいただけました。また、「今まで聞いてはいけな思っていた質問を聞けてよかったです。」というのもありました。お賽銭の行方とか、神饌やお供えの行方は皆さん気になっているようです（笑）。どうやれば神職や巫女になれるのかも良く聞かれました。中には「歴女」と呼ばれるような、かなり歴史に精通された人たちもいて、びっくりするような難しい質問をされることも多くなつてきています。

他の事業として通訳ガイド協会の方を対象とした勉強会を開催したりもしています。日本に来た外国人の方に直接日本の文化を伝えるためには、やはり神社のことは知っておきたいとの要望がありました。様々な形で、広報活動を積極的に行っているのですが、今後は、フェイスブックのような、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）なども、上手く活用していくことが重要なのではないかと考えています。

**加門** 別に密偵を放ったと言う訳ではないのですが、私の友達ふたりが、それぞれ、一回目と二回目のツアーに参加したんですよ。ふたりはお互いに面識もないのですが、ふたりとも口を揃えて「やる気と熱気がむんむん伝わってくる。」っておっしゃってまして、すごいなと思っただけなんですけど。

**山村** 埼玉県は、私から見ても、よく頑張っているところだと思います。埼玉県というのは、若い一般の日本人には、アニメの「聖地」みたいなイメージもあるらしく、例えば、『らき☆すた』の鷲宮神社さんとか、それ以外にも、「秩父」が非常にブームになっていますね。そこで話題になっている場所を巡ることを「聖地巡礼」と言ってみたり。そういう現象が起きるくらい、いろんな意味で注目を浴びているのだと思います。

**浅山** 旅行を媒介とした教化活動というのは、ツールとして非常に面白く、たくさん可能性をもったものだと思います。その「旅行」の中で、ただ見せるだけではなくて、そこで伝えるものというのがあるかと思っています。先ほども作法体験というお話がありました。それが、それ以外にどんなことを講義として取り入れていますか。特に要望が寄せられていることがあればお聞かせ下さい。

**武田** 「作法体験」と「各神社の歴史」は必須ですが、それ以外には「神話」が上げられますね。特に神社庁の教化委員会の活動と連携して、紙芝居をやったり、神話劇をやってみせたりをしています。参加された方から要望があったものに「神主さんの一日」と言うのがありました。やはり一般の方から見ると、神主はどんな一日を過ごしているのかが疑問だそうなんです。例えば、お祭りの準備から、潔斎、ご奉仕の流れとか、普通の一日の流れとか、そういったものもお話したりします。他にも家庭での祭祀や、神社の建築や境内の基本的なつくりにも興味が高いように思います。

やはり話で聞くだけでは判らないことも多いようです。本を読めばそれなりに知識はつくと思いますが、頭の中だけで知るのではなく、その場所に行つて、実際の体験をしてもら

うことを基本にしてみました。神社にお参りして神話劇や紙芝居を見るのも一つの体験です。雅楽の演奏を見た後、実際に楽器に触れてもらったりする。祓詞を奏上する時も、その前に、正座をして祓詞の浄書をやってみる。そして自分が書いたものを御神前で奏上してみる。そういつた「体験」を積極的に取り入れています。

**浅山** ありがとうございます。ここまで山村先生と加門先生には、「神社」「神道」の内側からではなく、外部から何に興味を持ち、どのような形でアプローチをし、そしてどのような感想をもったのかを中心にお話いただきました。それに対して、清水先生と武田先生には、「神社」「神道」の内側から、外部に対して、どのような形でアプローチし、何を伝えようとしてきたかについてお話していただきました。

ここからは、私も司会というよりも、参加者の一員として皆さんと一緒に、ざつくばらんな感じでお話ができればと思っています。

いま皆さんの話を聞いていて、「神社」「神道」に関する知識的欲求というものが非常に高まっている現状を実感しました。「神社」に対しての注目度が高まっている今だからこそ、この座談会のテーマが有る訳ですが、改めてそう思いました。その「流行」といいますか、ブームを支えている背景

には、当然ながら「神社が好き」という方々がおられます。ですがそれだけではなく、「パワースポット」という言葉・考え方が、世論というか世情の中に、確実に存在し、この「流行」を支えているかと思えます。「神社が好き」とはつきりと自覚している人だけではなく、その前段階といえますか、「スピリチュアルな聖地」「力を与えてくれるパワースポット」という言葉に惹かれて神社にやってくる人たち、極端に言う神社とお寺の区別を気にしない人たち、そんな人たちの方が圧倒的に多いのかなとも思えます。これは否定できないことだと思えますし、「パワースポット」と言う考え方が「神道」に有るか無いかといったら、あると思えます。ですけれども、「神道」とイコールではありません。これはお寺も同じです。日本人の精神的な風土の中の一部であろうとは思いますが。

それでは、なぜそんな流れが出来たのかと考えてみると、「パワースポット」という言葉の前に、「スピリチュアル」という、魂の浄化であるとか、オーラであるとか、そういういったものを対象とした「ブーム」があつたと思えます。では、それ以前はどんな表現がされてきたのでしょうか。確かに「精神性」とか、「精神世界」という表現が現在でもありますが、「ブーム」という社会問題や社会現象になった言葉に限定して時代を遡っていくと、「オカルト」という言葉で表されて

いた時代がありました。では、いつから「オカルト」という言葉で表現されてきたか、それ以前はどうだったのかは、ちよつと難しく、なかなか明確に切り分けて示しにくいのですが、「神秘現象」や「神秘的存在」などの、「神秘」という言葉であつたかと思えます。

そこから見ていくと、言葉がどんどん軽くなってきている訳ですね。「神秘」という少し堅苦しい表現だったものが、ちよつと不気味なものを感じさせるけど、少し軽く感じる「オカルト」という言葉になり、それがしばらく続いて、「スピリチュアル」という言葉になり、「スピリチュアル」からさらに特化した形の「パワースポット」という表現が生まれてくる。そして、その先に「神社」というものが現れてきて、スポットライトを浴びることとなった。「神社」はいつの時代にも変わらず存在



しているのですから、「再発見」と表現するべきでしょうが、「不易」と「流行」という、今回の座談会のテーマに則して、そのような表現をさせていただきます

ます。

それでは、いつ頃からこういつた「オカルト」であるとか、「スピリチュアル」という言葉・概念が、一般の俎上にあがるようになったのかということ、新聞や雑誌、インターネットを利用していろいろと探ってみました。『ムー』という雑誌が昭和五十四年に学研から発刊されているのですが、これが一つの転機になったように思えます。それ以前は、「オカルト」という題材は、サブカルチャーといいますが、アンダーグラウンドの存在、時においては幼稚な話題として、一般誌のテーマになつていないようです。そんな中、『ムー』という雑誌は、その「神秘」的なものを題材に取り上げていました。そう言ったものが雑誌として定期的に刊行されたというのは、「オカルト」という言葉が、社会性を持ちだしたと言うのは大げさですが、一般社会に露出し始める大きな転機だつたのではないでしょう。

また、その少し前くらいから、所謂、「心霊ブーム」といえるようなものが起きています。霊能者と呼ばれる人たちがメディアの前面に登場するようになりました。代表的な人として「宜保愛子さん」が挙げられます。テレビの画面に登場して「霊はいる。声が聞こえる。こうして欲しいと言っている。」と死者からのメッセージを伝える。昔から霊能者と呼ばれるような人たちはおられたのですが、テレビというメデ

イアに取り上げられて、社会のより前面に現れてきたのは、かなり新しいパターンだと思えます。他にも心霊研究家と称する人や新興宗教の教祖みたいな人が登場し、心霊写真を解説したり、霊視をしたりというものもありました。その流れの中、「丹波哲郎さん」が「大霊界」という言葉とともに登場して、所謂「霊界ブーム」というものが起こります。これらのような現象を当時はまだ「オカルト」という表現がされたとおもいます。

さらに時間を追っていくと、昭和六十年、「荻野真さん」の『孔雀王』という漫画の連載が始まっています。これも一つのきつかけになっていると思えます。密教の世界を二次元の中に投射し、世の中に現れた「魔」を打ち破るとか世の悲しみ体感するというようなストーリー性がある漫画で、かなり人気を博したと記憶しています。この昭和六十年は、「荒俣宏さん」の『帝都物語』が刊行された年でもあります。その三年後の昭和六十三年には、「夢枕獯さん」の『陰陽師』も刊行されました。ちょうどこの昭和六十年代に入ったあたりからこういったものへの関心の高まりが加速化していつているようにも思えます。

この時代を生きた方々といえますか、多感な年齢を過ぎた人たちは、私もその一人ですが、こういったものに多分に影響されているのではないのでしょうか。当時、この日本自

体が、まだその一部分であったかもしれないませんが、「オカルト」と呼ばれたものを、確実に志向しつつあったのは間違いないと思えます。それこそ、ついこの間にNHKのドラマで取り上げられ、改めて評価されましたが、「水木しげるさん」の『ゲゲゲの鬼太郎』などは、戦後すぐから現在に至るまで、定期的に取り上げられ、社会的に影響を与え続けてきたと言えると思えます。また昭和三十年台半ば頃から週刊や月刊の漫画雑誌が発刊されているのですが、特定の作品・作者にこだわらず、色々な漫画を目で追っていきますと、この昭和六十年位からは、手を変え品を変え「オカルト」なものの、「魔術」や「魔法」、「呪い」といった超自然的な力や存在が常に題材として取り上げられることが多くなっていると思えます。

このような昭和五十年・六十年代の流れが、平成元年以降ちよつと微妙な変わり方をしていのではないだろうかと思えます。それが象徴的に現れているのが、当時、社会問題として取り上げられていた「オウム真理教」の法人化ではないでしょうか。この頃から本格的な活動を開始し、社会問題として顕在化してきます。オウム真理教自体は昭和六十年前後からいろんな事件を起こしつつ、平成元年の法人化を経て、平成七年の所謂「オウム事件」を迎えます。この過渡期とも言える時に、加門先生が平成四年に『人丸調伏令』、平成六

年に『大江戸魔方陣』を刊行されています。この一連のオウム事件以降、一旦、世の中が宗教的なもの、信仰的なものをチープなものとして捉え直し、一旦、「オカルト」という流れ、「オカルト」に対するが目に見える形で志向性が止まったのではないかと思います。

一旦、止まったこの流れがいつ頃から再開するのか。今度は逆に、今の「スピリチュアル」や「パワースポット」のブームの直接のきっかけは何だろうと同じように探ってみると、「江原啓之さん」という人物が見つかりました。この方の影響が一番大きいと思われます。平成十七年に「江原さん」が出演する『オーラの泉』という番組が始まります。番組の中で「江原さん」は、非常に霊的な発言や行動をされていますが、自分の活動をカウンセリングだと位置付け、番組自体もそれまでの同種のものとは違い、非常に明るい感じになっていました。信仰的なものを極端に前面に出すものではないけれども、そういったものを提示された。これは非常に影響が大きかったと思います。この前年には、先ほど武田先生から名前が出ました「細木数子さん」の『ズバリ言うわよ!』という番組が始まっています。最初、「細木さん」は「占い師」というスタイルで話をされていたのですが、様々な発言がいろんな社会問題になったりしていました。

平成十六年、十七年のテレビ番組をきっかけに素地が浸透

し始め、社会現象として顕現するようになった。これが今に至る「スピリチュアル」・「パワースポット」のブームだと思います。これが爆発的と言いか確定した流れといいますが、「神社」や「神道」に目が向きだすのは何時からなんだろう。これも探ってみたのですが、これがはつきり判らないんです。おそらくは平成十六年から「江原さん」は『スピリチュアル・サンクチュアリ』というムック本を毎年のように出され、多くの「神社」を取り上げていますが、所謂「江原本」の域を超えていないと思います。ただ、確実に一般に出版された本の流れからいうと、平成二十年頃から完全に風向きが変わっているのではないかと思います。奇しくも平成二十年は『ズバリ言うわよ!』、平成二十一年は『オーラの泉』の番組が終了しました。

**加門** 今、出版された本の流れ、風向きが変わったとおっしゃられました。それはどう変わったんですか。

**浅山** 出版される本の量が決定的に変わっていると思います。私は、丁度、平成二十一年に神社本庁の広報担当の部署におりまして、書籍・雑誌の企画の話、問い合わせ、編集協力の依頼等に係ってましたし、それ以前からも、書店に行きどんな本が出てくるのかを気にして観察していたのです

が、平成二十年・二十一年を境に、数量が決定的に変わって  
いると思います。

**加門** 多分そのくらいの時期から「神道」や「神社」に  
関する本や雑誌がコンビニに置かれるようになってきたんで  
すね。いわゆる一般誌ではなくて、「パワースポット」の本  
という、テーマを限ったムック本がコンビニ限定みたいな形  
で、セブンイレブンなどに置かれるようになった。それが  
大体今おっしゃったような時期ですね。

**山村** 確かに「神道」や「神社」に関する本がメジャー  
化した時期は、平成二十年位からになると思います。今の  
お話は一度、年表にされたらいいと思いますよ。



いずれにしても、  
今指摘されたように  
平成の時代になって  
から、特に平成二  
年頃から、「時代」  
というか、そう言っ  
たものが変わってき  
ています。私の認識  
だと、一つは、バブ

ル経済の崩壊というのが大きいと思います。物質とか、お金  
とか、そういうものに対して、若い人が非常に冷めた目で見  
るようになってきた。バブル崩壊が平成二年から三年にかけ  
てですから、その時期に、そんな人たちの文化、若者たちの  
サブカルチャーを含めた「文化」自体も変わってきています。  
なぜそういうことが言えるかというと、漫画とアニメの変  
化を見ると割と判り易いと思います。それまでは、例えば、  
『機動戦士ガンダム』を見てもそうですが、いわゆる機械・  
ロボットを使い、物質文明の力を借りて超人的な力を得ると  
いったアニメや漫画が人気を博していた。『ガンダム』はま  
だ今ありますけれども、それが平成の前、昭和の時代、ごろま  
での主流だったと思います。それが主人公が戦いながら悩む  
という『エヴァンゲリオン』とか、だんだん身近な、自分の  
足元を見詰め直すようなアニメが増えてきました。その中に  
怨霊とか、呪いとか、占いとか、そういう「オカルト」ブー  
ムの範疇に入るようなものが現れてきます。平成十二年には  
『宮崎駿さん』の映画『千と千尋の神隠し』が出ています。  
それに先立って平成九年には『もののけ姫』という映画もあ  
ったのですが。これで若者を中心とした「精神世界」、ある  
いはそういうカルチャーが大きく変わってきたようなんです  
ね。実は漫画やアニメのオタクと私は時々話したり、情報交  
換したりするんですが、彼らも「平成十二年位からだんだん

変わってくるんだ。」と言っているんですね。

今、平成二十年頃を境に出版される本の量が変わったとお話がありました。アニメや漫画の世界でもそのころから題材に取り上げられることが多くなっています。「かみちゅー！」というアニメがあるのですが、これは尾道の神社が舞台になつていまして、モデルになった神社も存在しています。このアニメの最初の放映は平成十七年ですが、何回かの再放送やDVDの発売などを経て平成二十年位から非常に人気が出だしたり、あるいは宮城県の鼻節神社という神社をモデルにした『かんなぎ』という漫画も大体同じような経緯を経ていきます。先ほど少し触れましたが埼玉の鷲宮神社をモデルにした『らき☆すた』だけじゃなく、他にもいくつものアニメや漫画が、同じ時期、同じような経緯で人気を博すようになっていきます。神社が漫画の舞台として取り上げられ、それがアニメ化され、若い人にとって非常に身近であると感じられる文化にだんだん移行していくんですね。つまり、派手なものとか、力が強いもの、昔の西洋文明的な、要するに、善悪二元論とか、正しいか、間違っているかとか、そういう感覚ではなくて、むしろ自分にとって優しい、あるいは自分にとって身近である、そういう文化にだんだん移行していくのが平成の御代だったという気が私自身はしています。

これは、年代ごとに日本人の意識と文化の流れをまとめて

ごらんになられると、非常にもしろい時代の変遷というのが見えてくるかと思うんです。私から言わせていただきますと、そういうものこそ、日本人の今に生きる文化であつて、もともと強いのか、弱いのかとか、超常現象とか、SFとか、オカルトとか、そういったものは日本に実は余り永続的にはなじまなかつたのではないのでしょうか。たしかにそれは時代によつて変化はあると思います。ですが、先ほど「オカルト」を担つた方などは、もうテレビに出られなくなつたりもしています。オカルティックなものも、今どちらかというと主流からは排除されているのではないのでしょうか。

昭和からそういう時代が続いてきたが、今、シュリンクしてきたというか、意識と精神性も非常に縮小化してきた。日本人が小さくなつたとか、よく言われますけど、そういうものも含めて神道界もちよつと考えていかなければいけないのではないかという気がします。ただ、身近であるということでは神道にとつて必ずしも悪いことではない。どんどん神道とか、神社とかが、その人にとって身近になつていくという流は、今後、我々としても現実社会とのつながりという意味で考えなければいけないし、むしろ我々が、加門先生も私もそうですけれども、いろんな物語をつくるときに、非常にそういうことを生かせるという気が私はいたしております。

**浅山** 今のお話は、非常に面白いと思います。山村先生

は、サブカルチャーを含めた文化の変化を、平成の初めの頃のバブル崩壊にポイントを置いて、前後でのアニメ・漫画のテーマ設定から指摘されました。物質文明の力を借りるといったテーマから、次第にそれがもつリアルなもの、身近な自分の足元を見詰め直すような題材に主流が変わってきた。

その一つの現れが、平成十二年の『千と千尋の神隠し』ではないか。これは山村先生だけではなく、所謂、オタクと呼ばれる人たちがそうに感じているということでした。確かに『千と千尋の神隠し』は衝撃的でした。少女が日常の世界から神様たちのいる異界に迷い込み、様々な体験をするというストーリーでした。もちろん映画の中に出てくるキャラクターがかわいいとか、不思議な世界を垣間見たとか、様々な要素があったと思いますが、この世界観が一般の人たちに受け入れられたと言うのに驚きがありました。登場した神様は、遠い世界にいるのではなく、日常の世界の中にいたんだと。あの映画で見方が変わったというか、見方が改まったという方はかなりおられたんだと思います。

**山村** そうですね。いろんな捉え方はできるとは思いますが、基本的には、『もののけ姫』の映画でアニミズムの世界を多くの国民が見せられたというか、見てしまったんだと

思います。日本人が持つアニミズムの世界観、自然信仰の中に帰れるという、最初の「窓口」はその作品に依って出来たんじゃないかという人が、私の周りにはかなり多いです。さらに、『千と千尋の神隠し』で、日本独自の非日常的な空間を見ていたのではないのでしょうか。加門先生、その辺りはいかがですか？

**加門** 仰るとおりで、そういった意味では、あの映画の影響は大きかったんじゃないでしょうか。ただ逆に言うと、『千と千尋の神隠し』を見ないと、そのところがもう判らなくなっていたというのは、私はむしろがっかりしてしまいました。

先ず些細なことですが、「パワースポット」という言葉を最初に使ったのは『ムー』なんです。私も皆様と似たような世代ですから、『ムー』や、「中岡俊哉さん」の『恐怖の心霊写真集』なども見えています。その中、昭和の後半に超能力者の「清田益章さん」が「パワースポット」という言葉を使っているんですね。だけど、そのときの言葉というのは、もうちょっと、とんがった、オカルト的な意味で使われていました。それが巡り巡って「江原さん」を筆頭とした人達によって、ちょっとソフィステイケート（洗練）された形で再構築されたようですね。



ただ、今回の座談会の大きなテーマである「流行」のひとつとして、「パワー

スポット」という言葉を使うなら、さつき、ムーブメントの盛衰を聞かせていた

ですが、神社本庁を含めた神社界がこの話を大上段にかぎすのは、三年から五年ほど、遅いんじゃないのかというのが正直な思いです。個々の神社、例えば神田明神さんとか埼玉県神社庁とか、いろんなところで個別には頑張っていて、それこそ言挙げをして活動しているんですけど、神社界全体での言挙げが遅過ぎた。だから、先ほどのマニュアル偏重ですとか、スピリチュアル本みたいなのが流行って、正直な話、機会は沢山あったのに、イニシアチブをとり損ねたんじゃないかという気持ちが悪くしています。私は過去の「オカルト」業界もすごく好きなのですが、そこは置いておいて、とりあえず「現在」ということを考えた時、神社側での言挙げが遅過ぎてしてしまったために、「江原さん」や「細木さん」を初めとした、ある意味、ちょっと偏った「霊能的な」「スピ

リチュアルな」方法というのが、私たち、つまり神社の崇敬者という自覚のない一般人の間に浸透してしまった部分がある訳ですね。

座談会の趣旨の説明でも、手水のやり方がすごく詳しい、それを通り越して、絶対に作法通りじゃなければならぬとか、そうじゃなければご利益半減とか罰が当たるとか、ちょっと行き過ぎではないかと思うものもあるというような話がありました。でも、一般書店に並んでいる本から神社に目を向け始めた人々というのは、右も左もわからない。そのときに手近にあつて、声の大きい人のものが正しいと思ってしまう訳ですね。そうすると、柄杓はまず右手に持たないとだめなんだとなってしまう。そうじゃなくて、手を浄めることが根本なのにね。実際、神社で先輩格らしい人が初心者の子なんかには手水場でびしびしと指導していたりする。そういうのを見ていると、正直、うーんと唸ってしまいます。

今、神社にお参りすると皆さん、なんとしてでも正面でお参りしようとしますよね。そのせいで拜殿の真正面だけはずらつと並ぶのに、両脇はわりとすいていたりしています。あれもなんでなのでしょう。確かに礼儀正しいのですが、逆をいうと、「拜殿の正面の先にしか神さまはいないの？そこでしかお参りしても意味はないと思ってるの？」って気持ちになつてしまいます。確かに礼儀正しいことはいいいこと

だと思っただけだね。融通が利かないというか、狹量ですよ。先ほど浅山さんが狒犬の陰からちよろつと拝んだら、みんなが、きつと見たというの、「そんなところで拝んだって」という眼差しもあつたと思いますし、「横入りして」みたいな気持ちもあつたんだと思います。礼儀を重んじるところや神を尊ぶ気持ち、形骸だけに陥ってしまっているんじゃないかと感じる時もあります。

そこで、先ほどの「スピリチュアル」・「オカルト」まで話を戻しますが、何で神社の人、神主さんたちの言葉より、そういう霊能者の言葉のほうが響いたのかというと、やっぱり私たち一般人からすると、神様というのは神秘的な存在なんです。だから、霊能者が、「この神様はこういうお姿をしている。」とか、「こんなことを仰っている。」とか、そういう「スピリチュアル」なことを言うと、そっちのほうが響いてしまうんです。神主さんたちは、どちらかというと……今後はどうなるか判りませんが、「来る者拒まず、去る者追わず」的な形で、それこそ二十四時間オープンな神社をただ静かに神様とともにお祭りしている訳でしょう。だけど、それをいいことにして、妙な人たちが幅をきかせて、妙なことを言い出すわけです。その手の本やブログを読んでいると時々出てくると思っんですが、「どこどここの神社に行ったら場が汚れていたから自分が清めた。」とか、「神の力を解放し

た。」とか、「神社に実は魔が住んでいたから自分が神を入れておいた。」とか、そんなことを言うような人たちもいます。正直言って、「神主、なめられてるよ。」と。「それでいいの?」と思ってしまう。

勿論、神主さんたちが大声で、神様どうこうと言うのは違うとは思いますが。ただ、もう少し意識はしてもらいたい。一時期、あちこちの神社で問題になりましたけど、偏つたことを知識として持ってしまったスピリチュアリスト、パワースポットめぐりの女の子たちが、御神木の皮を剥いでしまったり、枝を折ってしまったたり、お酒をかけてしまったりということがありましたね。そんなことが重なるとう木は枯れてしまっているわけですが、そのときに、神主さんたちがやったのは、「木が傷むので止めてください。」という張り紙でした。これでは駄目だと私は思います。「罰が当たるからやめろ。」と言えなかつたら駄目だと思うんですよ。

あくまでも一般人として言うならば、神社というのは先ずもって「神様のいる場所」と誰しもが思う訳です。その意識を神主さんたちが、神様を信じているとか、その存在を確信しているとか、そういったレベルのことではなくて、「神様のいる場所」なんだということを、もつと私たちに感じさせてくれないと。神様のいる場所にお勤めしている方々の矜持を感じさせて欲しいんです。それがなくて、合理的に「木

が傷む」と言ってしまうと、訳の判らない霊能者なんかの、おかしい言葉の方が響いてしまう。それでちよつと、みんなが変な方向に行ってしまうところもあるんじゃないかと思ってしまうんですけどね。

浅山 加門先生の仰る、神社は「神様がいる場所」だから、境内を汚してはいけない、これをしてはいけないと言うことは、本来は当たり前のことだったはずですよ。神社だけではなく、公共の場所も全部そうだったと思います。本当は、木が傷むから何をしてはいけないではなくて、そんなことをすると罰が当たるとみんな知っていたはずなんですよね。恐らくそれは自然に学んだものだったはずのものが、なぜか伝わらなくなっているというのがどこかにあるのかなと思います。

山村 それはまさに西洋合理主義に洗脳された「日本人」が六十六年間続くと、そういうことが、生活実感として、まるで判らなくなってしまう典型的な事例です。一回途切れてしまったと考えないと、今現在の起きている現象は、理解できないということが沢山あります。

先ほどの「パワースポット」の木に抱きつくという事例だけでなく、身近に神社があつて、その神社をお参りする

といったごく当たり前のことから、戦後の「日本人」というのはだんだん遠のいていったと私は考えています。実際に神社でよく見かける光景、先ほどお参りした東京大神宮でもそうでしたが、皆さん、鳥居をくぐるのにお辞儀をしています。それを見て私は驚きましたけれど、これも最近の傾向です。昔は、今でもそういう人はいませんが、鳥居の前でお辞儀をせずにそのまますつと通り抜けたり、鳥居をくぐらないで境内に入つていたりする人が多かつたものです。酷い人は神社へ放火する人さえいる。そういう戦後の日本人たちが最初から神社のことを非常に軽視していた。あるいは、「国家神道」という昔の間違った偏見を未だに抱えている世代が社会の各方面のトップにいて、「神道」イコール「悪」みたいな、そういう間違つたイメージがまだ残っています。そういう世界の中で、今後どうすればいいのかという話をしていきたい、あるいは、しなければならぬのではないかという気がします。

失礼ですけど、加門先生のようにきつちりと基本を押さえつつ、本をお書きになる人はともかく、普通の人は、神社には入れても「神道」の世界に、全く立ち入れなくなってしまうというというのが、今の社会の実態です。そんな方がどういう風に「神道」の世界に入ればいいのかというの、こちららもなんと説明してよいか非常に戸惑つてしまいます。だけ

ら、上がってゆくステップというか、階段というのはどうなっているのか。どこからどう階段を上っていけば、普通の一般人の人がこの「神道文化」の領域に立ち入ることができるのか。そういうところから議論しないと、話をしないといけないのかなと思っっています。非常に難しいというのは判りませんが。

**加門** 一つは、「講」というものの存在があるのじゃないでしょうか。先ほど個人の参拜が多いとか、現代の御師のような働きという話題もありましたが、私は、戦後というよりむしろ明治以降に、「講」が急激に力を失ってきたのが、ひとつの原因としてあるのではないかと思います。信仰したいと思ったときに、周りに教育する場がなくなってしまうたんですね。「講」というものが淘汰されて、みんなで神社をお参りする機会がなくなりました。私はもともと神社参拝というのは、チーム参拝の方が本来だったのではないのかと思っます。お伊勢参りなど、その典型ですね。個人個人、一人だけで祈願するというのは、お百度を踏むぐらいでしかなくて、特に大きな神社へは、町なり、村なり、みんなでお参りに行くものだったんじゃないでしょうか。そんな伝統と言うか習慣と言うか、共同体としての参りの習慣みたいなものがないなくなってしまうのはすごく残念です。

それと同時に、近所にそういうことを伝えていく教育者がいなくなつたのも大きいでしょう。教育者というのは、昔ながらの「街の拝み屋さん」でも、自分のお婆ちゃんでもいいんです。そういう人達が、「この場所には神様がいます。」とか、「ここに腰かけると罰が当たるよ。」みたいなことを伝えてきた。地元で伝わってきた「地の教育」とでも言うべきものが薄くなつてしまつたがために、わからなくなつてしまつたというところもあるのかなと。だから、みんな本を読むしかなくて、「よし、手水は右手からだな。」としか考えないし、それしか知らない。

**清水** 確かに仰る通りで、耳が痛いような話ばかりです。私が社頭にいてもそんな光景を目にすることがあります。例えば、狛犬の上に子供が登つていても親が注意しなかつたりとか。私は自分の子供と町を歩く時、神社の前を通る時は、必ず一礼して挨拶をさせています。拝殿の近くまで行かなくても、遠くからでもいいから、必ずお辞儀をさせているんですが、最近は子供が自分から進んで、ちゃんとお辞儀をするようになりました。そういう家庭での教育が行われなくなつてきたのかなとも思います。「個」になつてきたというのでしょうか、核家族が増えて、おじいさんやおばあさんから、「あれしたら罰が当たるよ」とか、「こういうことをしたらだ



めだよ」ということが言われなくなつたのかなというのは感じますね。

境内で、子供が普通だつたら考えられないようなところになつたとしても、親が何も言わない。

ここを上つたらいけないだよということも教えてくれないから、上つてはいけないということ判らない。誰も言つてくれないから判らないというのが多いのかなと感じました。

**武田** そのお話、自戒の気持ちを含めてですが、私もそう思います。実際に、私もご社頭だけではなく、子供のことを注意しない親の姿を目にすることがあります。私は子供を神社の保育園に預けているんですが、朝、私が保育園に送つていくとき、私も神社の前を通ると「おはようございませう」と挨拶をさせています。鳥居の前からでもいいので、きつちりとご挨拶をさせていまして、最近は何も自分からするようになりまして。大きくなつてからも、小さい頃からそうし

ていたんだという記憶は大切なのかなと思ひまして、良いことと悪いことのどちらも「お天道様が見てるよ。」つて気持ちを親として教えられればと思います。

子供の通つている保育園の先生も清水先生と同じように「境内で、子供が普通だつたら考えられないような事をして、親が何も言わない。今の親は何を考えているんだ。」という話を良くされています。私も実際にそんな光景を目にしている訳ですが、しちやいけないことを教わつてないからしてしまうのではなくて、親を含めて周りの人が、教えないといけないんじゃないかと思ひます。これは自戒を含めてですが、いいこともしちやいけないことも、周りに伝えていけないといけないんだと感じています。

私は普段神社庁に勤めています。埼玉県本庄市に鎮座します金鑽神社でご奉仕をすることがあります。社頭にいます。おじいさんが亡くなつたから神棚を処分したいのだがどうすればいいと質問されることがあります。そういう方は多分、おじいさんやおばあさんが「個」として、勝手にやつていたことだと思われているようです。ですから、うちはおもう神棚は要らないよという方が来られたら、なるべく判りやすく説明をするよう務めています。

当神社ではお正月に、天照皇大神宮をはじめ、地域的な信仰の関係から出雲大社など四枚のお神札をセットにして頒布

しています。その四枚のお札を見本として授与所にディスプレイしておきます。今年のお正月にお参りに来た人が授与所にお神札を受けに寄られました。どちらのお札でしょうかと訊ねたら、出雲大社のお札を指差して「これでいいです」と言われたんですね。何で出雲大社のお札だけなのかなと思つて、「何でこのお神札だけでいいんですか」と聞いたら、「出雲大社に行つたことがあるから。」と答えられました。

私は「そういうことじゃないんです。これは天照大御神をお祭りしていただいて、地元の氏神様のお神札をお祭りし、この辺の風習で出雲さんのお神札をお祭りするのが正しいお祭りの仕方なんですよ」とお神札についての説明をしました。そういうことを家族から、おじいさんやおばあさんから聞いてこなかったもので、単純に何でも良いのでお神札だけだ張つておけばいい、お祭りしていればいいんだという考え方があつたとの事でした。こういうことを一例にあげても、家庭で教えられないことも神社界からなるべく多く発信をしていかなければいけないのかなと、今、加門先生や山村先生の話を書いて思つた次第です。

**山村** それでも、その家族や地域の中で伝えられなくなつてしまつた時代の教訓については、昨年の東日本大震災が大きな一つの考えるきっかけになるのではないかと思いま

す。いわゆる個人主義という教育を、戦後ずっと我々を含めて数世代の間、受けてきました。ですが結局、個人個人でバラバラに行動していたら、はつきり言つて自分の命だけでなく地域や家族全体が死んでしまうんですね。日本人に限らず人間というものは、自然の災害の前では、個人だと非常に小さな、ちっぽけな存在だということは、身に沁みて判つたはずです。「個人の力はすごいんだ、無限の力を秘めているんだ。」と仰る方はまだおられますが、それよりも当然、自然の力の方が明らかにすごい訳です。そういうことを考えていると、「自分だけが正しい」とか、「自分だけが生きていく」とか、そういうものの考え方は徐々にかもしませんが、若い世代を含めて希薄になつてきたように思えます。「何で自然というものは強いのか」、「あなたよりどういう風に強いのか」ということから教えていけば、少なくとも子供たちはその話を聞くようになっていきます。

私も岩手や宮城、福島にも行き、被災地の神社なども回つて参りました。もちろん被災されたたくさんの方々にもお会いしました。そこで感じたのですが、子供たちは人の言うことをよく聞くようになっていくんですね。びつくりしたのは、福島の被災地で、「外に出るな」ということでした。福島全県の地域の神社もかなり回りましたが、原発の事故があつて、「こうしなさい」という大人の言葉を子供がしつかり聞

くようになっていきます。そうしないと彼らは死ぬということ  
を、子供ながらに判っているんですね。そんな時代だからこ  
そ、普通の、昔の日本だったら当たり前のことがようやく身  
に沁みて判るようになってくる。今まさにそういう「神道の  
精神」が必要だということが、改めて理解されるようになって  
きた。震災をきっかけに大きく「流れ」が変わってきたの  
ではないかという気がしております。

## 浅山

「伝えられていない」・「伝えなければいけない」、  
逆に言うと「聞いていない」・「聞かせなければいけない」  
といった問題は、非常に難しい問題だなと思います。山村先  
生が仰るように西洋合理主義に洗脳された「日本人」という  
ものは、確かに問題の源かもしれませぬ。一般の社会生活を  
して行く上で、公私の区分というものがあります。普通なら  
ば「公（おおやけ・こう）」というものがあって、それに対  
する「私（わたくし・し）」があつて、この使い分けは、オ  
フィシャル、プライベートという言い方をするはずですが、  
もしかすると、私もそうなのかもしれないませんが、公私の私の  
部分の先に「個」・「私だけ」・「パーソナル」というのが  
あつて、そこが徐々に大きくなってきて、もしかすると「私」  
を飲み込んでしまつて、「公」に肩を並べているのかなと思  
うところがあります。「公」も「私」も「個」もどれも大切

だと思ひますが、その場ではどれが重要なのかは、自分の中  
で優劣・軽重はつけているつもりですが、それが混在してし  
まう自分というのもあるのかなと思ひます。

同じようにしていても、人に注意できない自分というのが  
あつたりするときは、「あの人にはあの人理由があるんだ  
な」という勝手な思い込みというか自己正当化みたいなのが  
あります。当然、相手を斟酌することが必要なときはありま  
すが、過剰な斟酌をして相手には言わないというのは、これ  
は「私」ではなくて「個」ですよ。恐らく我々が生きてい  
く中で、「公」の中で存在するならば、「公」としても「私」  
としても、その人に対してもちゃんと言い続けることが必要  
なんだというを、今のお話を聞いて改めて実感しました。

先ほど加門先生がから、もつと前からこういつた活動、広  
報活動に力を入れるべきではなかったか。三年から五年ほど  
遅いのではないかといつたご指摘がありました。本当に仰る  
通りだと思ひます。我々も忸怩たる思ひの中、活動している  
ところもあります。ただ、活動していなかつた訳ではなくて、  
「見える」形になかなかならなかつた。もちろんずっと積極  
的に活動されていたところはあるのですが、活動していても、  
先ほど清水先生のお話にもありましたが、マスメディアによ  
り積極的に情報をリリースしなければ存在が認められないと  
いうような風潮があつたかと思ひます。しかし、積極的に

リリースしても、結局、題材として取り上げられないことが多かったようにも思います。改めて思うことですが、最近テレビのニュース、ネットニュースも含めてですが、一昔前なら絶対ニュースにならなかつたものが取り上げられるようになってきました。単なる社頭の風景だけではなくて、七五三の賑わいやご祈願の様子等、さまざまなお祭りが出るようになってきました。しかし、昔は神社の大祭ですら取り上げられることは少なかったのではないのでしょうか。特殊神事として民俗芸能になつているものはスポットライトを浴びるけれども、神社の御社殿は画面に映らないというのが非常に多かつたように思います。それが今は、スポットライトが少しずつ増えてきて、神社のご社殿でのお祭りの映像が映されるようになってきています。マスメディアの取り上げ方が変わったから、そういう世情になつたのか、そんな世情を反映してマスメディアの取り上げ方が変わったのか、じっくり考えなければいけないと思うところですが。

マスメディアの取り上げ方と世情といえますか、「家族や地域の中で伝えられなくなつてしまつた」と言うことに関連して、もう一つ思うところがあります。先ほど「細木数子さん」について、少し触れましたが、確か平成十八年の年末に、「細木さん」が、女性の参拝作法について、「女性は拍手を打たず男性の後を二歩下がつてお参りをするものなのに、これ

が正しくできない人間が多過ぎる」という発言をされて、一時期、非常に物議を醸しました。もしかすると、そういう作法は、あるのかもしれませんが。私は神職子弟ではなく一般の家庭に育つて、親族の付き合いや地域のつながりの中で成長しました。何度となく親戚、地域の方々、友人達と一緒に神社にお参りしてきましたが、そんな作法でお参りする人を見たことがありませんでした。しかしお参りの仕方は「二礼二拍手一礼」だけでないことも知っています。それは多くの世の中の人と同じだと思います。だから、それを「細木さん」の考えなんだと割り切ることが出来なかつた人たちは、それに戸惑つたのでしょうか。そういう人たちが非常に多くて、社会現象と言うのは大げさかも知れませんが、世間を賑わせた問題になりました。

これは今に至る非常に大きな要素だつたのではないかなと思います。この出来事をどうだと言う訳ではないのですが、これ以降、いい意味でも、悪い意味でも、神社の参拝、その作法について知りたいという需要が急激に高まつているのではないかなと思います。それ以前の刊行物は、確かにムック本など、よく出ていたのは出ていたのですが、みんな知識的なもので、歴史、神話、そういった概略的な緩やかなもの、信仰的な知識が主で、作法のような身体性にかかわらないものが中心でした。

しかし、この出来事以降、お参りの仕方、もしくは何々のされ方とか、お祓いの仕方……。加門先生の本にありました『お祓い日和』のように、お祓いというのはどういうものなのかとか、気分を落ちつけるというのはどういうことなのかという、そういう精神的な部分、宗教的な部分にもかなりスポットが広がってきたのではないかと何となく思います。

**山村** 正確な事実関係は判りませんが、あのときは「細木さん」の発言に対して、少し遅れてそうではないというコメントは神社本庁の方から一応お出しになったんですね。

**浅山** 正式なコメントとしては出ていませんが、取材に対して回答はしています。当時、インターネットでニュースを配信している「J・C・A・S・T」から電話取材がありました。その時、テレビで放送されてからの状況の確認と「細木さん」の発言の正否、また今後、申入れをするのか否かについて質問がありました。今もウェブ上にそのニュースが残っています。その際、正しいのか正しくないのか、申入れをするのかしないのかを何度も聞かれ、その作法については細木さん独自の考えであつて、間違っているからといって申入れをする予定はないと、回答したように記憶しています。

**加門** みんな正しいのか、正しくないのか、はつきりと区別したいんですよ。「こうしなければならぬ」とか、「こうでなければならぬ」というマストの部分を、色々な場面で要求しているんだと思います。これは今の「スピリチュアル」な局面だけではなく、社会全体に言えることだと思えますね。加えて、さつきもちよつと触れましたが、自分のいる環境の中での指導者というか教えてくれる人を求めているんだと思います。何も神社のことを知らないけど、「神社って面白そう」と思つて、神社に足を運ぶようになったばかりの人が、細木さんの番組をたまたま、独り暮らしのアパートの中でか見ていたら、「ああ、そうなんだ」と思つてしまいます。

でも、そこにおじいちゃんとか、親とか、他の誰かがいて、「ねえ、ねえ、これどうなの？」と聞かれたときに、「家はそんなことしないよ」と一言言えば、それで何でもないことになるはずですよ。なのにそうならなかった。「細木さん」の発言に問い合わせがあったというのも、取材側が既に一般常識としての作法の確信が持てない状況にあると言うことでしょう。「細木さん」の作法に一番感化されたのは、一人暮らしの女性が中心ですよ。今、特に「スピリチュアル」に魅せられて引き寄せられているのも、主に都市部の核家族の一員です。ベースの教育がなされてない人達で、最近ちよつ

と神社がおもしろいと思っている人があの番組を見たら、疑問も持てないし、周囲の人も違うとは言わない。そうすると、そういうことがどんどん広がってしまう。

ただ、それこそ私が言うのもおこがましいんですけど、神社の作法も、江戸からずつと以前を遡って見ていけば、色々変わっていますよね。だから、そういう大きな発言が世に出ることで、今後、変わっていく作法というのものもあるかもしれないし、それでもいいのかもしれませんが。けど、何でもかんでもと言う訳にはいかないでしょう。そこに何のストッパーも存在しないと、大きく歪むものも出てくると思います。

**山村** 私から言わせていただくと、今の若い人を含めて、もつと普遍的なもの、身近でありながらかつ普遍的なものを求めているんですね。いわゆる自然に対する環境保護とか、あるいは、今回の震災に際しては、神道でいえば「基本」である祈りと感謝の心であるとか、そういうものは時代に係らずつと存在していて、潜在的にも求められているんじゃないでしょうか。今回の震災の被災地を回ってみて強く感じたことがあります。そういう祈りとか感謝の心といったものが今一度、見つめ直されて、この神社があつてくれてありがたい、ありがたかったという神社が、やはり東北の各県に多々あるんですね。実際に命が助かった。なぜ助かったのかとい

うと、「そこ（神社）に行こう」と思ったからだ、そう仰る方も多かったです。そういった人は日常的に神社に行かれています。ちよつと高台にあつたから津波から助かった。火事や家屋の倒壊や、その他の二次災害とか、いろいろあつたけど、それから逃れることが出来た、そう仰る方がいました。時代の流行だけではなくて、ずつと続くものというのは何なのか。今あつたような「正しい」「正しくない」の話題とは違いますが、地元の人と話していると「人間にとつて役に立つこと」と、「本当に正しいこと」が、ひよつとしてあるんじゃないかという気がします。ただ、これだけ情報過多の時代になると、結局、判らなくなってしまうんですね。

今の世の中には、いろんな情報があつて、様々な選択肢があります。例えば、ある南相馬の神職さんがこんなことを仰っていました。こんな原発の事故があつたせいで、南相馬では稲の作付けが禁止され、田植えが出来なくなりました。田植えができないということは、当然、秋にも感謝のお祭りができない。二月に豊作を祈る祭りができなくて、十一月にも新穀感謝の祭りもできない。これが崩れるとおかしくなる。それが出来ないから、結局、復興祭という祭りに代えて行つたと。

結局、形が変わる訳ですね。形が変わるときに、人間というのは必ず心理的にも感情面でも非常に揺らぎます。その揺

らぎの時点で、日本人というのはどうやって精神性を保ってきたかということがまさに普遍的なテーマだと思えます。それを神職の方々がいろんな流行や価値観の揺れに直面したとき、どうやって戻してこられたのかということに、非常に関心があります。それは私だけではなく、この現代に生きる人たちも、非常に知りたがっていることだと思います。

**清水** 確かにそうかもしれません。しっかりとした価値観を神社から大勢の崇敬者・参拝者の方々に、指し示すことが、なかなか出来ない、出来ていない。これは今という時代の中で、神社界が一番弱いところなのかもしれません。「権威」という形で示さなければならぬという訳ではないのですが、今の時代に求められている「しっかりとした芯の通った説得」、「相手を納得させられる言葉」、そういったものが残念ながら用意できていないですね。それを用意する、準備するのは非常に難しい作業だと思いますが……。

**浅山** これまでの話の中で、世代間だけに限りませんが、「断絶」というポイントもあつたかと思えます。その「断絶」に対して、何を伝えていかなければならないのかという問題もそこにあります。だからこそ継続していかなければならないこともあるのですが、なぜ継続するのか、継続するための

抛り処は何なのか。所謂、バランスではないですが、それが「神社」だ、「神様に対する信仰なんだ」と言われたらそこまでですけども、一般社会から、神社は何を求められているのか、もしくは神社から何を学び取りたいと思っているのかを明らかにするのも重要なことだと思います。

神様がいるという思い・信念の下、人々が神社に集つていきます。今、神社というものが非常に脚光を浴びています。しかし脚光のあるなしに係らず当たり前前に神社は存在していて、地域によつては、先ほどの話にもあつたように、新たに來る人たちに対して、「なぜここに來るの？」という疑問を持つこともある。元からその場にいる人、また新たに來た人、その双方は、別の意識を持ちつつも、同じ意識というのはどこかにあるのではないかと思えます。だからこそ、何か大きな声を上げたことに対して、戸惑・動揺を双方が感じてしまうということがあると思うんですけども。何というんでしょうか、非常に難しくなってきましたが。

**山村** 難しいというか、気をつけなければいけないのは、「イメージ」ではないでしょうか。若い人も皆さん、それぞれの神社に対して、もちろん御祭神を含めてですが、それぞれのイメージをお持ちのようです。例えば、神田明神さんには平将門公がおられるとか、そういうことも知っているわけ

ですね。それで、どういうイメージを持つて神社に来るのか、そして神社側の人の持つイメージがどうあつて、それがどこまで重なるのかという問題があるんじゃないでしょうか。ちよつと話が飛んでしまつて申し訳ないですが、だんだん日本人が、物質的なものを求める心から、今そういう落ちついたもの、あるいは心の安定を求めるというものに戻つてきていると私は思っています。ただ、今まで持ち続けたイメージを変えろというのは、なかなか難しいですよ。

これまで神社に対して日本人が持ち続けたイメージというのは、はっきり言つて、やはり神様がおられる場所ではなくて、現代人にとつて単なる一つの「風景」になつてしまつていたという気がしています。

それは何でわかるかという、最近すごくはやつていて、これもまたアニメの話で、アニメオタの友達に教えていただいたエピソードで恐縮ですけど、『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない』というアニメ、略して『あの花』と呼ばれているアニメがあります。これは武田先生のおられる埼玉県秩父が舞台で、秩父神社や三峯神社、その山の蔭が映っています。物語の背景に必ず神社が使われているんです。しかし、神社の中に入るのはないんです。ただ通り過ぎるだけです。今の若い人には、神社がただの「風景」として映つてしまつていて、すごく身近な「風景」であつて、「中」に入

つてどのようにするかという内容までは説かれていない。物語の進行上、ただ単にそのまま通り過ぎていく。その前でいろんなおしゃべりをするとか、そういった一つの身近な風景として映つているわけです。

その身近な「風景」、神社の中に来てもらつて、それをどう押さえていくかというのは、まさにこれからの神職さんのお仕事になるんだと思います。もうここまで時代的に来てしまつたんだと思います。鳥居をくぐつて、その中に入つてどうしなさいというのは、これから強く社会にメッセージを発していかないといけないのではないのでしょうか。私にはそういう気がしています。多くの人たちが、神社が好きだという時代になつてきたのは間違いないのですが、いかがでしょうか。

**加門** 先ほどから出ている「伝える」と言うこと、ある意味で「教育」という言葉で説明されることなんです、それはすごく大切だと思います。ですがもう一つ、今の山村先生の話から一歩進んで、神社の中に入ったときに、神職さんたちがどのようなことを、私たち崇敬者に対して発せられるかというのも大切だと思います。

神社に一歩入ったとき、私たちはまず雰囲気を感じ取ろうとします。神社という場所がどうなつていて、どういう感じ

を持つているのかと、神社好きとされる人たちはとてもよく見えています。それこそ神職さん達がドキドキしてしまいうぐらいよく見ているんですよ。たとえば、お掃除をしている人がどういう格好をしているとか、巫女さんが頭につけている飾りから、お守りをくいださるときに両手を添えてくいださったとか。悪い例だと、あそこの神社はお金を出したのに、「そこに置き」みたいな形でやられたとか、結構、細かいところまで見ているんです。そして、そういう細かい部分と同時に、全体としての雰囲気というものも敏感にキャッチしています。

神社というのは清浄というのを非常に好んで、汚れを嫌い、「破え」というものが大事なんですよというの、言葉で教えていかなくはならない。でも、神社に行つたときに、さつき正式参拝させていただいたように、影が映るような床で、汚すことすらできないような清潔さや美しさがある、そういうものを眼前にばんと見せられると、言葉よりも先に、「ああ、こういうところなんだ」と、私たちにガンと伝わってくるわけです。だから、たとえとしての確かどうかは疑問ですが、父の背中を見せるというんでしょうか、語らずして実行する、整えるというところで、神社に入った人たちに何かを伝える。それが、本当の意味で神道というものを教える一つの核みたいに私は思いますけどね。

**浅山** ありがとうございます。加門先生から「語らずして実行する」ことが核になるのではないかというお話をいただきました。我々の世界には「神職は言挙げせず、後ろ姿で教化するもの。」という表現があります。実際に理想とする姿を見せることは非常に重要な方法で、我々も心に刻み得ることだと思えます。また、山村先生は、神社に一步踏み込んできてもらうために、言葉とか、中でのんごがされていのかを伝えなければならぬ。確かに後ろ姿を見せてというのも大切な方法ですけれども、これから入る人のために、いかにして言葉にして伝えていくのかも重要な問題です。

この二方面というのが非常に重要だというお話になるのだと思います。

**清水** 私も、色々な方からご相談を受けることがありますし、いろんな話を耳にします。たとえば、「パワースポット」ブームを受けてか、何と何かに来て欲しいということ、作られた信仰というわけではないのですが、「パワースポット」や「パワーストーン」といったものを組み込んだ巡礼、時代の流れに沿った「新しい巡礼」のようなものを作ってはどうかというのもありました。それをきっかけにして神社に人が来てくれるという部分では、非常にいい話だとは

思うんですが、果たしてそれを受けていいものかどうかという判断が非常に難しいところがあると思います。

**武田** 私はさいたま市の観光の委員もやっている関係で、ある大学の観光学部の先生とお話をしたことが有るので、その際に「パワースポットといった言葉を使って宣伝したらどうだろうか。神社庁の立場としてどうだろうか」ということを聞かれたことがありました。その辺りをどういふふうにクリアにすればいいのか、果たしてそれは良いことなのか、非常に判断しづらいことがありました。今日の座談会のテーマの説明にもありましたし、ここまでの話の中でも出てきたと思いますが、神社は存在することに大きな意味があるが、集まる人なしには存在できない面も有って、そこで派



生していく人たちに何を伝えていくのかということが重要なんだということもよく判ります。かといって、人を集めるために何でもかんでもやっていつていいのかというのが

難しくて……。

今、例に出た「パワースポット」や「パワーストーン」を組み込んだ巡礼なんてもの、確かに人を呼ぶツールとしては面白いとは思いますが、果たしてそういったことをどどんややっていくことが神社界にとつていいことなのかと思うこともあります。また「流行り廃り」という問題もあると思います。「流行り」に乗ってしまつたがために、将来的に逆効果になってしまふということもあるんじゃないでしょうか。最近、神社庁の業務で、地域の方から実際にお話を伺う機会が多くなつたのですが、我々神社界としては一つの筋を通すような考えを持つて、接していかないといけないと感じています。地域の人には地域の間人として熱い思いをお持ちなんです、その辺りにも神社との葛藤というの少しあるのかなと思います。

**加門** 以前、東京都神社庁が主催した都内での巡拝のバツアアーのとき、懇親会で、東京大神宮の松山宮司さんが、奇しくも仰つていましたが、ぶれなければいいんじゃないでしょうか。「何を伝えたいのかを神社側がちゃんと持つていふ」というのは、生意気かもしれないですけど、私たちはちゃんと見えている。参拝者にこびたものというのはすぐ判るんですよね。

でも、その一方で、参拝して楽しい、神社の周りも楽しいという、「アミューズメントパーク」としての神社の存在というのもあると思います。昔は門前町の雰囲気や店構えとか、神社と共有されていて一体感があったのが、今は街と神社が若干乖離してしまっていますよね。そのために、神社の中である程度の楽しみというか、ウキウキするようなものを与えなくてはならないというところはあると思うんですね。

だから、先ほど「神主さんと行く神社ツアー」に知り合いふたりが行ったとき、「すぐくおもしろかった。でも、土産を買う時間がなかった」と言う言葉が出てくる。それが普通の神社参拝をする人たちだし、ある意味、大部分のお客さん、参拝者の気持ちじゃないのかなと思います。

**武田** そうですね。その辺の付加価値というものも考えないといけないですね。ただ、「パワースポット」ということに直面して、何処まで許されて、何処から許されないのかということとは本当に難しいと思います。平成二十二年十一月八日付や同月二十二日付の『神社新報』の「論説」に「パワースポット」に関連したことが書かれていたんですが、今回、座談会のお話をいただいて、「安易な伝統破壊は慎むべき」というようなことが書かれていたのを改めて読み直してみました。ここら辺との戦いなのかなと。

**浅山** 神社に対する信仰、神様に対する崇敬の念とかというの、ある意味で普遍的に存在しているものだと思うんですが、それから付加価値的に、というか副次的に生まれる信仰というのがあるのじゃないかと思います。たとえば、お百度なんて、誰かが決めた訳でもありませんし、鳥居の笠木に石を投げて上手に乗つかると願いが叶うとか、成人の儀式として力試しに持ち上げた力石が、今は、持ち上げると幸運になるとかそう言った信仰があります。こういうことは、自然発生的に生まれたんだと思います。ですけど、間違いなく、誰かが始めたはずです。誰も始めなければ存在しないですから。誰かが始めた、誰かが考えた、一つの信仰の形であり、行事であり、行為だと思うんですが、それをあえて「作る」必要はないということなのかなと思います。お参りされる方が「作る」というのはあると思います。ジンクスとして。ただ、それを、「招かんがな」「売らんがな」と話題性を作るという意味で信仰的なものを「作る」というのは、ちょっと難しいのかなと思います。ただ、こういう伝統があつて、こういう信仰があつて、こういういたものもありますよという見せる必要というのも一方であるのかなと思います。そういうことを考えると、どこまで許されて、どこまで許されないのかというのが、ほとんど存在しないのかもしれない。

難しいですね。誰かがつくったそういう「ムーブメント」ならば、それをあえて否定することはないですけれども、神社がその「ムーブメント」を積極的に、その目的のためだけにつくるのは難しいところなのかなと。それが、加門先生が言われた、見抜けるものは見抜かれてしまいますよというところにつながってくるのかなと思います。

**加門** 確かにそうだと思います。数年前、十年ほど昔にお参りをしたことのある神社に久しぶりにお参りをしたんですが、以前は境内には無かったお社が来ていました。それが新しく勧請したというならいいんですけど、「昔からありますよ」みたいな形でお祭りされて、新しいお守りなんかを出したりしたんです。ちよつと不思議に思ってたんで調べてみたら、「あそこは宮司が変わって、どここの広告会社と手を組んでやり始めたんだ。」みたいなことが、地元の人たちの口から、ぱつと出てくる。やつぱり変だなと思う人たちがいて、熱心に調べた人がいたそうなんです。つまり、やつぱり見抜かれる。本当におつしやるとおりに、自然発生的、必要によってでてくるものと、「こういうのが好きでしょう」と言つて与えるのは、違うんじゃないかなと思いますね。

**山村** あくまでも私見ですが、メインカルチャー、神道

を文化としてとらえた場合のカルチャーの中で、メインカルチャーとサブカルチャーというのは、あくまで分けるべきだと思つています。例えば、神田明神さんに「AKB48」が来るといふのは、私はすばらしいことだと思つています。それこそ人が集まつて神威が増していくという考えもあります。これはそのきっかけになる現象の一つですよ。こういうのを否定していたら、それこそサブカルですら否定されてしまいかねないという状況になりますので。どこがメインで、どこがサブなのかという捉え方を、それぞれの神社、神職さんがしつかりとやればいいんじゃないかなと思つています。どこをメインにするかというのは、神社の信仰の話であつたり、それぞれの御祭神の話になつたりであると思つています。それはそれぞれの神社さんの考え方があつていいはずですよ。

ただ最終的には、「神社」あるいは「神道」というのは、それぞれを「結ぶ」何かがあるんだと考えています。この「結ぶ」の精神というのは非常に大事だと思つています。必ずサブのものをメインのものに「結ぶ」、それを忘れなければいいのだと思つています。その「結ぶ」ということで、ここだけは死守する、広くあまねく国民にすべてに言えること、最低限これは死守するんだということも、ぜひ同時に言つていただきたい。それが、日本人の精神文化、あるいはカルチャーになつていけば、私はすごくいいのではないかなと思つて

います。

かつての日本ではそうだった、神道というのは日本人のメインカルチャーだったと私は思っております。いろいろな形で信仰はいろいろあるにしろ、仏教が来る前、仏教が入ってからも、基本的には神道がメインカルチャーであり続けましたが、戦後、そうではなくなってしまうところがあります。やはりそこはどうしても惜しまなければならぬ。そこを何とかしなきゃいけないという意識を私自身は持っていますし、多くの神職の方々もそう思っております。ないかという気が私はいたしております。

**浅山** 山村先生の「神道」を文化として捉えた場合のメ

インカルチャーとサブカルチャーの対比は、非常に示唆に富んだお話だと思います。その中で、サブカルチャーとメインカルチャーを「結ぶ」ことの大切さ、そしてその「結ぶ」何が「神社」あるいは「神道」にはそれが有るのではないかと指摘されました。

日本では、戦後、「神道」に関する考え方かなり否定され、社会的に「断絶」を作るきっかけになったのかもしれない。それは家庭や地域での伝承、また神社から社会への文化発信も同じく阻害を受けていたと思います。戦後は、神道に関する書籍が出されにくく、また購買の意欲も低下していました。

しかし、一方では神道に関する学術書の刊行は、学術発信は、絶えず続けられ現在に至っています。この神道に関する学術発信が、情報発信という意味でメインカルチャーだとするならば、この近年、平成二十年前後からの、神道を題材にした雑誌や冊子、ムックの流通というのは、サブカルチャーに位置付けられるのではないのでしょうか。確かにコンビニであるとか、販売形態の変化というものが大きく影響しているのかもしれないが、現在、社会にどちらが読まれるかと言うならば、学術書というよりは、むしろサブであるはずの雑誌やムックになっていきます。サブカルチャー的な情報発信がメインになっているというのは、少し変な気もしますが、決して無視できない存在であることは間違いありません。どちらがメインかサブか判りにくくなっていますが、いずれにせよ、その双方を「結ぶ」ことがいま大切になっているのだと思います。

ちよつと宣伝になってしまうのですが、こちらに「神道文化検定(神社検定)」のパンフレットがあります。これは、検定という形をとりながら、「神社」や「神道」に興味を持った方々に、より神社や神道のことについて知ってもらおうということ、日本文化交流財団が主催して開催するものです。神道文化会では、現在、後援となっていますが、全面的に企画に参与し協力し、積極的に盛り上げようとしています。



今回は第一回目となっておりますが、今年は特に古事記千三百年という年であることを踏まえ、「神道」の根幹、「神社」の根幹にかかわる「神話」を第一の柱に取り上げています。そしてもう一つの柱が、神社とは如何なるものなのか、参拝の作法や流れ等についての基本的なことを取り上げようとしています。それを『神話のおへそ』『神社のいろは』というテキストにまとめ刊行することとなりました。また今後も様々なテーマを題材として出版し、文化発信をしようという企画しています。今後、この検定がどう評価されるのか、まだ実施されていないので何とも言えませんが、そういった形での情報発信を遅まきながら、この世界でも行っていこうと思っています。これを一つの契機に積極的な活動が行っていければと思っております。

この検定の話が、座談会のまとめという訳ではないのですが、そろそろ時間の方も迫って参りましたので、皆さんから一言ずついただければと思います。

**清水** 今、私は皆さんのお話を聞いていて、思ったことが一つあります。一月も半ばを過ぎ、初詣がちょうど一段落しました。現在の神社にとって経済的に最も大きな影響がある「初詣」も、言わば戦後に自然発生的に起きた流行の延長線上の習慣という文化だと思います。それも、だれかが高

い見地から、学術的にとか操作的に情報を流したとか、そういうことではありません。むしろ一般の人々が求めて自然に発生し、現代社会の中に定着したムーブメント・「流行」の一つだと思えます。新年にお参りをし、多くの人たちが一年の幸せを神様に祈り、心の安らぎを求めている。本当の「流行」というのは、社会にある無名の人々が求め作ってきたもので、またそれが時代に応じて定着してきたものではないでしょう。アルビン・トフラーは「第三の波」ということを言っています。古代にまず「農業革命」があつて、次に「産業革命」が起きて、更に新しい第三の革命がやってくる。現代はその大きな「第三の波」という「情報革命」が押し寄せ、てくる中、神社の文化というのは一定して固定したものではなくて、常に変化していくのではないのでしょうか。その変化こそが神社の文化の常態の姿なのかなと思います。そうした意味において、これからもまた、どんどん変わっていくかざるを得ないと思えますし、「流行」というものをもつとフレキシブルに受けとめながら、共存していく必要があるのではないかと。最後になりましたが、そう思っています。

**武田** 先ほど「神社検定」の話が出ましたが、「神主さんと神社へ行こう」の参加者の感想に、神道に関する基礎的な講座を神社本庁や神社庁のようになしつかりした団体でやつ

てほしいという意見がたくさんありました。検定のパンフレットを県内の神社のご社頭に置きましたら、皮肉な話ですが、神社本庁で発行している教化冊子よりもパンフレットを持っていく人の方が、非常に多いような現状がありました。検定を受けるにあたっては、教化冊子に書いてあるようなことを勉強していかないとと思うのですが。これは、やはり時代が求めているのかなということを感じました。非常に時宜を得た内容ではないかなとは考えております。当県の神社庁としてもできるかぎり協力して行きたいと思しますので、様々な企画を進めていただければと思います。よろしくお願います。

**山村** 最後に、これを話し出すと止まらなくなるのですが、インターネットに関して一言だけ。ご存知のように、インターネットには、いろんな活用法があります。バーチャル参拝とか、最近ではエア参拝とか、いろんなことが問題視されたり、やるべきであるとか、やるべきじゃないかとか、様々な論争が神道界の中で続いていることは知っています。ただ、『神道と日本人』にも書いたことなんですが、神々の世界というのは、自由に時間と空間を超越するという御存在であり、古の時代から、インターネットの概念を軽々と飛び越えておられたのではないかと、私は思っています。インタ

インターネットと同じように自由に場所と空間を超越されている。インターネットは時間を超えられないんですが、時間さえ超える概念というのを、昔の先人たちは神の概念として持っていた、そう思っています。これは小野祖教先生の著書によりますと、日本の神々は様々に連携し合われると仰られています。具体的に言いますと、例えば、天満宮様にお参りをしても、他の稲荷神社さんをお願いを届けていただける、そういう教えもあると伺っております。ということは、いろんな神々が連携をなさっている。つまり、時空間を超える御存在になられていると言うことではないでしょうか。いうなれば、インターネットという概念を神道界はいち早く作り上げてきたんだと思います。確かにインターネットは、いろいろな使い方がありますが、主客が転倒していて、インターネットに使われるようになってはまずい。こちらが積極的に主にならなければいけない。インターネットを使われる方々が、そういう知識や勉強のために、使えるようにしていけばいいのではないかと思っています。別にインターネットが来たからというの、黒船が来たみたいな話でとられることは全くない。むしろそれをこちらから逆に積極的に打って出る武器としても使える。こちらが使うという発想が重要なのではないでしようか。

どちらかという、先ほどの話も同様なんですけど、逆に

二、三年遅いとか、受け身になってしまおうというのが今の神道界では少し気になる場所です。ここはぜひとも逆に使いつつ切りたいという希望も込めて、最後に申し上げます。

**加門** 「流行」と「不易」という今回の一番根本的なテ

ーマですけど、私は「変化」の中にある「不易」、「不変」、「変わらないもの」というものは、敢然と日本人の中に、殊に「神道」に関してはあると思います。今回、不幸なことではありましたが、東日本大震災というものがありません。地震だけではなく津波、そして何度もの余震、さらに原発問題に直面したとき、私も含め多くの人たちが、何とか鎮めてくれ、何とか助けてくれ、何とかしてくれと、みんな祈ったはず。自覚的に神や仏に祈るのではなく、ただただ自然や運命に祈った。その祈りの対象に、私はとても古い神の姿みたいなものを感じました。だれかわからないけれども、父でも母でもないものに対して助けを求め、救ってくれ、鎮めてくれと願う、非常に原始的な祈りの心ですね。加えて、恐ろしく、まがまがしく、生殺与奪の権利を持っている古の神の姿というのを、言葉にはできなくても、みんなが感じていると、私は実感したんです。だから、根本的な部分での人間、日本人というのは余り変わらないんじゃないのかな。神社の

佇まいは変わったとしてもね。

震災の中で自分の命を犠牲にしてまで人を助ける人もいれば、被災地で空き巣に入るような人もいる。それは多分、千年、二千年前から何も変わらないし、そういう人たちが、いざというときに、お鎮まりくださいと祈る神の姿、魂の形というのも、実はそんなに変わっていないんじゃないのかなと思います。だから、そこを中心にして、光の移ろいのように作法が変わったり、神社の形態が変わっても、それは大したことじゃない。神社側の経営の問題とか、個々の日本人の生活スタイルによって自由に変化すべきところは変化していてもいいと思います。ただ、本当に核の部分というのはぶれないでいて欲しい。というよりも、ぶれないんじゃないか、変わらないんじゃないか。そんな楽観的な考えを、私は震災を機に持つようになりました。まともにはないですけど、何となく大丈夫かな、と。まだ日本人は大丈夫じゃないのかなという感じを持っていますね。

**浅山** ありがとうございます。今回、「流行と神道文化」という題名で神道文化の発信について、「不易」と「流行」といった視点から再確認、再認識と申し上げたのですが、やはり非常に難しく多岐にわたる問題であったということ、今改めて実感しました。時代は変わる、形も変わる。当然、

情報の発信の仕方も変わる。人に伝えるためツール・手段すらも変わる。時においては、いろいろな形をとらなければいけない。時においては多様性をとらないほうがいいこともあるのかもしれない。しかし時代は移ろい行き、どんどん変わっていく。時宜に応じて、時代に応じて「流行」していきます。ただし、それに対して、そこに集う人たちが、集いたいと思う人たちに変わらないもの、求めているものというのは、恐らく昔から神様に対して感謝をささげるであるとか、また自分の望みを何とかかなえて欲しいという切実な祈りであるとか、こういった信仰であるとか、またそこに神様はいるんだという安心感、信頼というものがあるのではないかなと、今回のお話を聞いて、改めて感じました。

今回は、話題が多岐に互り取り留めのない感じになってしまいました。また機会を改めてお話を伺えればと思っております。これにて座談会を閉じさせていただきます。本日は誠に有難う御座いました。

(了)